

歌に触れる

遊縁の衆(人生を数倍楽しむ会)

◎平成二十三年二月十九日(第五回)

(佐藤 紀之)

降る雪も 遠慮がちかな 小春日の 日差しに解けて 路面につこり
夕方がすこし長くなつたのは雪明りだけのせいではないね
隙間より 目に入る息子の 学ぶ背に 越えかけためらう 鉛筆の音
真夜中に 石油を詰める ポンプ音 も少しやるぞの 声に聞こえる
鶴嘴を凍てつく道路に 叩きつけ 春よ目覚めよと 叫んでいる

(佐藤 亮照)

石灯笼 仏飯を置きふと見れば 一羽のカラス 逃げ去る小鳥
節分を過ぎて降る雪 心地よく 嚴冬の日々 終わりの予感

(佐藤 志亮)

雪の寺 薄墨描く 白と黒 瞑想ふける 色無き世界

(松田 昌泰)

退院の 告知に勝る ものものはなし 見舞いが遂に 元気いただく
退院の 告知に喜ぶ 満面に やわらか日射しも 微笑み返す

(黒沼 貞志)

遠ざかる ちり紙交換 耳にして エコ喧伝の 功罪想う
最近の メディア賑わす 「新公共」 空しく踊る 言葉の遊び
民と官 めざす協働 進んでも 変わらぬ乖離 心の^{おの}澱に
ハレの日前 ゆれる心は ただの父 想いはひとつ 娘の行く末
いま時の 「世話にはならぬ」 は常識か 遠慮を外して 伝える本音